

未来づくりは、教育から始まる。

2023 年度報告書

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター

NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター
〒399-1801 長野県下伊那郡泰阜村 6342-2
TEL:0260-25-2851/E-mail:info@greenwood.or.jp
HP:www.greenwood.or.jp

2023 年度報告書
発行責任者：辻 英之
編集者：齋藤 新
発行年月日：2024 年 7 月 1 日



代表理事
辻 英之

アイスランドとメキシコで、それぞれ女性の大統領が誕生しました。アイスランドは史上2人目、メキシコは史上初だそうです。アイスランドといえば、2023年6月20日に世界経済フォーラム（WFF）が発表した、男女平等の達成度合いを示す「ジェンダーギャップ指標」のランキングにおいて、14年連続の世界一になりました。

一方で日本の順位はといえば、146か国中125位（過去最低）と、目も当てられない状況です。G7（主要7か国）の中でも圧倒的に低いことは、男女平等だけではなく社会のあちこちで平等な機会と権利がないがしろにされている危機であるともいえます。

私たちの拠点である長野県泰阜村もまだまだ男性社会だといわれますが、最近は女性議員が誕生するなど、少しずつ男女平等の芽も出てきました。私たちNPOグリーンウッドは女性が創設した団体です。そして開設以来、役員の半分は女性になるよう努めてきました。職員も女性の方が多い状況が続いています。私たちもまた、男女平等だけではなく、誰もが平等な機会と権利を持つ社会を実現するための学びを追い求めてきました。

多様性が声高に謳われる時代の今こそ、これまでも増して丁寧な教育活動を続けていく所存です。今後とも皆様の力強いご支援をお願いすると共に、皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げて、御礼のあいさつにさせていただきます。本当にありがとうございます。

未来づくりは教育から 世界を変える力をこどもたちに

こどもをとりまく問題が増加する1980年代。時代と逆行するようなこどもが全てを決めるフリープログラムキャンプの中で「1年間キャンプがしたい！そうすれば食べ物も自分たちで作れるし、食器や、家だって作れるかもしれない！」こんな声がこどもから上がり始めました。その言葉にこの指とまれで集まったこどもと大人が、1年間キャンプをしながら家を創るという夢を実現させました。それがグリーンウッドの土台となる「暮らしの学校だいらぼっち」です。世界のどこにもない唯一無二の場所を創り出しました。

38年経った今でも、仲間と協力して田畑を耕し、薪を集め、地域の方の力を借りながら、手と足と仲間の知恵を集めて、「自分たちがより良いと思う暮らし」を創り出しています。正解のない新たな世界を創ることへの挑戦は、こどもに世界を創り出す力があることの証明でもあります。

ウクライナ危機、多国間の争い、金融不安に未知のウイルス、格差に分断と現代社会は正解のない課題が山積みです。出口のない閉塞感が覆う世界に必要なのは、「自ら行動し、失敗から学ぶ力。そして他者との違いを力に変えて協働すること」です。だいらぼっちで培ってきた教育が今まさに求められていると感じています。

小さな山村やすおか村で生み出した教育を社会に広げ、私たちは世界を変える力をこどもたちに伝えていきます。

VISION

私たちの目指す社会

※ あんじゃねえな社会の実現

人と人が関わり続けることで、安心と希望が持てる未来を実現する

MISSION

私たちが果たす使命

※ ひとねる

世界とつながり、自分の世界を変える力を育てる

ACTION

具体的な行動

暮らしから学ぶ ねっこ教育

手と足と知恵を使って、仲間と暮らす必然の暮らしを学び場に

※「あんじゃねえ」「ひとねる」は泰阜村の方言です。「あんじゃねえ」は「安心だ」「案じるな・大丈夫だ」の意味。「ひとねる」は「人となる」「立派に育つ」の意味です。泰阜村の風土で育まれた言葉に大切なものがあると感じ、私たちのビジョン、ミッションとしています。

○ こども / 全国

- ・暮らしの学校 だいらぼっち
- ・信州こども山賊キャンプ
- ・森のようちえん まめぼっち

○ こども / 泰阜村

- ・やすおか探検隊 あんじゃねっこ
（泰阜保育園年長児）
- ・あんじゃね学校（泰阜小児童）
- ・放課後児童クラブ いってきました
（泰阜小児童）

○ 普及（他地域・他団体）

- ・グリーンウッド施設・事業見学コース
- ・ノウハウ提供
- ・各種講演

○ 青年（高校生・大学生）

- ・1年間の教師・指導者育成プロジェクト
- ・信州こども山賊キャンプボランティア
- ・インターン
- ・大学ゼミ合宿受け入れ
- ・大学授業・ゲストスピーク
- ・その他 ワークショップなど

- ・学習支援（泰阜中学生）
- ・やすおか暮らしを楽しむ会てまひま
（村民）

○ 新たなチャレンジ

- ・児童養護施設児童向けキャンプ
- ・南アルプス子どもの村小学校受け入れ
- ・企業との連携 他

Contents

ご挨拶（代表理事）・目次……………1

団体 VISION・MISSION……………2

2023年度事業報告

参加者総数……………3

特集……………5

こども対象事業

暮らしの学校だいらぼっち…………7

信州こども山賊キャンプ……………9

泰阜村教育活動……………11

青年対象事業……………13

学び普及事業……………15

その他の取り組み……………16

「ガイア自然学校代表 成田氏

× 代表 辻 対談……………17

2023年度寄付報告……………19

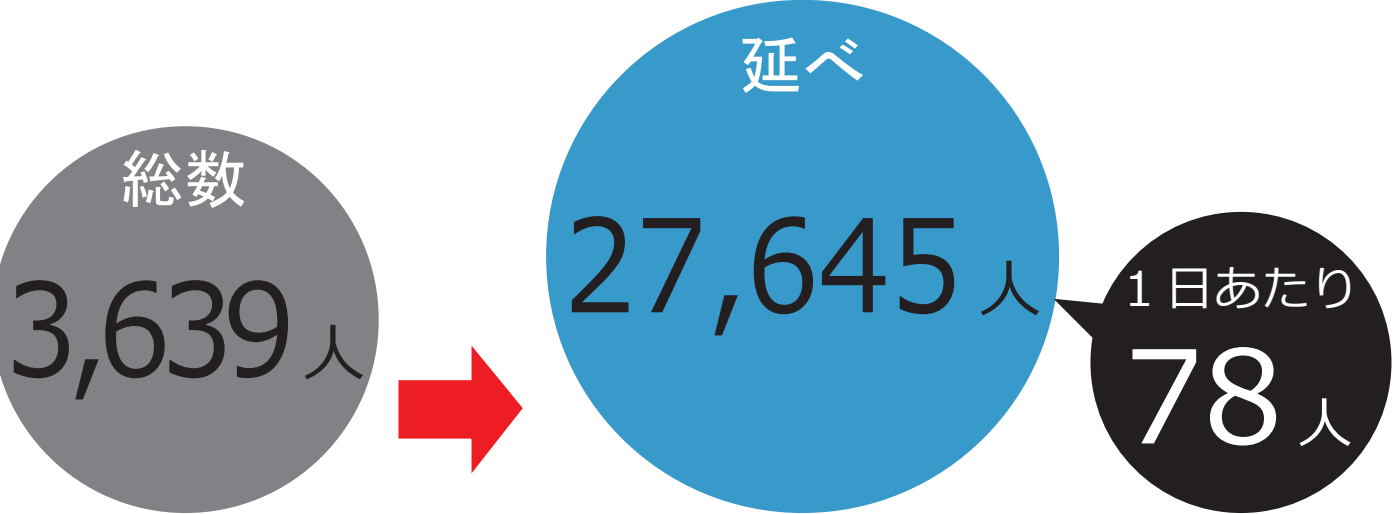
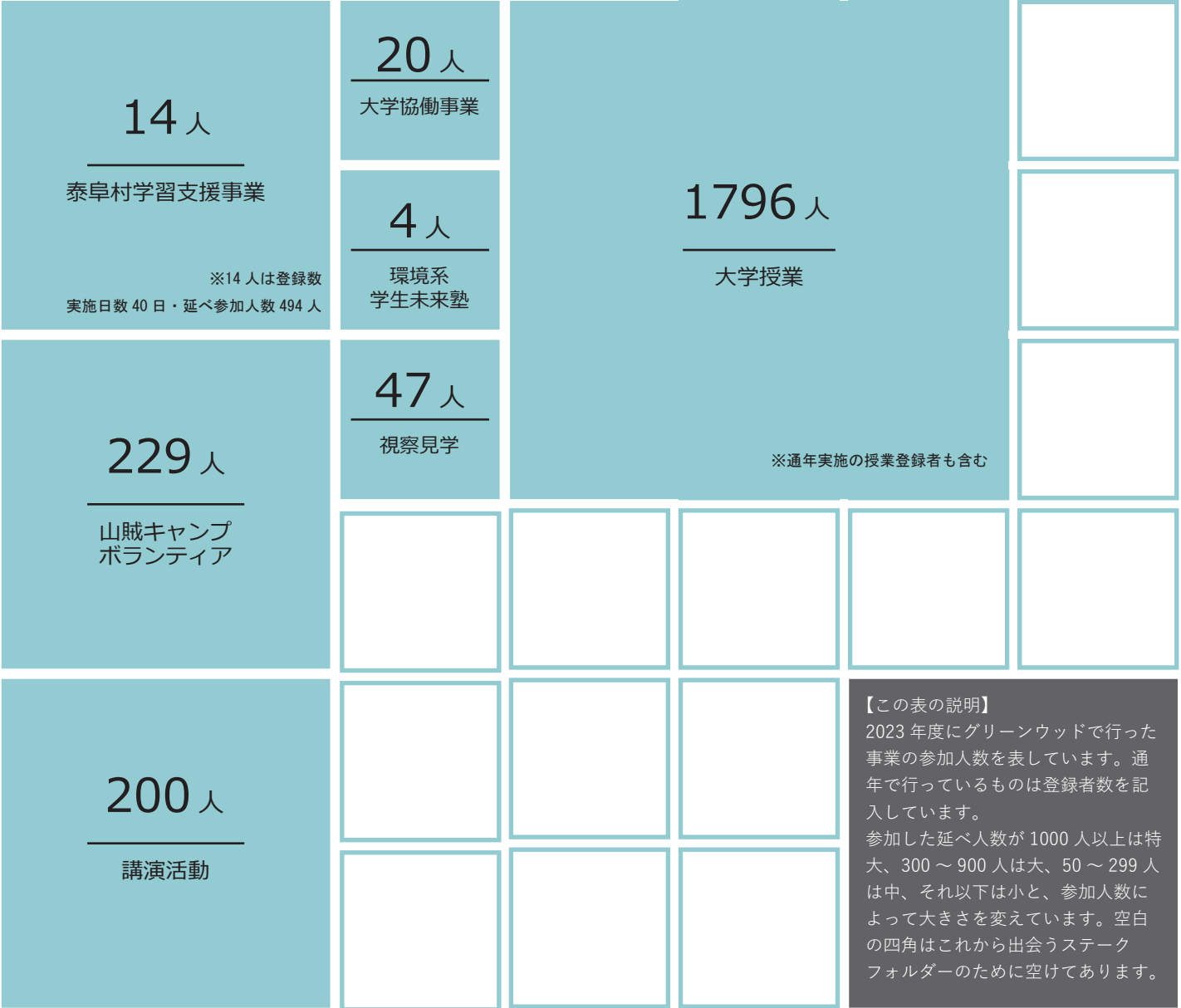
2023年度会計報告……………20

2023年度事業一覧……………21

2024年度事業計画……………22

2024年度にむけてスタッフより…………23

新聞掲載記事……………25



5月に新型コロナウイルスが5類となりました。様々な制限が撤廃されたことで事業数、参加者も元に戻し、さらに動きが活発化していく1年となりました。

参加延べ人数が27,000人を超えたのはコロナ前の2019年以来です。一方で参加実数は3600人程度に留まっています。その理由は山賊キャンプも定員をコロナ前に戻し、全てのコースを実施しましたが、放課後児童クラブの登録者が増えたことにより、キャンプの開催日を縮小させたことで参加定員が減少しています。今後は体験を受ける母数を増やす努力をしていかなければならないと感じています。

青年対象事業も増加しています。キャンプボランティア育成事業に加え、インターン参加者も年々増え、今年度は11人の参加となっています。参加日数は125日となり、今後も増えてくると予想しています。

様々な成果を出している一方で、夏キャンプ期間中の台風により4コースを短縮するなど、今後も気候変動の影響は強く受けると考えられます。予期せぬトラブルに対応できる事業づくりに取り組む必要があります。

また将来、親や指導者となる青年育成は、間接的な未来のこどもの体験拡大にもつながります。直接体験だけではなく活動も視野に入れていく必要を感じています。

【特集】日本全国そして海外からも | NPO インターンシップ

6年目に突入した NPO 短期インターンシップ事業。コロナ禍での事業休止を経て、現在では学生がひっきりなしに訪れるようになりました。今や滞在日数は年間活動日数の約半分に近づいています。続けていく中で、学生だけでなく子どもたちにも学びや成果がもたらされていることがわかってきました。一体、若者たちは何を求めやってきてどういった学びを得ているのでしょうか。



短期インターンシップ事業とは？

短期インターンシップ（以下、インターン）の受け入れが始まったのは 2018 年。職員募集を進めるにあたって「働くことをイメージできるようにインターンシップ制度を作ってはどうか？」との意見からスタートしました。

これまで青年の受け入れはキャンプボランティアやゼミ合宿など事業のみに限られていました。1 週間以上の長さで日常的に青年がいるという経験は初めてのことで、グリーンウッドとしてもチャレンジでした。

おおよそ形が整った 2020 年。いよいよこれからというときに、世界的なコロナウイルスの蔓延によりインターンの受け入れはストップせざるを得なくなりました。青年たちの体験と学びの場が奪われている中で、そのような状況だからこそなんとか提供できないかと方法を模索しました。ウイルスの感染拡大のリスクのため人の移動が社会的にも制限されていたので、来訪前の検査と数日の待機期間、そして再度の検査を行っ



てから子どもたちと関わる方法を考えました。そのため 10 日以上滞在を参加条件として、2021 年に受け入れを再開しました。当初は「10 日も来てくれる学生はいるのか」との意見もありましたが、蓋を開けてみると申込件数は右肩上がり。インターネットでの検索や大学の先生のご紹介などで、東北から九州、遠くは海外からも参加され、2023 年度の参加者は計 11 名、延べ日数は 125 日に渡っています。

「自分と向き合えた」と語る若者たち

インターンに対して特別なプログラムは提供しません。行うのは私たちの日常業務の手伝いと山村留学、学童のこどもとの実践のみです。そうした日々を経て、多くの学生が学びとして挙げていたのは、「自分と向き合えた」ということでした。学びを与えた大きな要因は「話し合って暮らしを創るこどもたちの姿」です。

だいたらばっちはどんなときも話し合いで物事を決めていきます。年齢差や経験に関係なく一人ひとりがお互いの気持ちをまっすぐ伝え合う姿を見て、間違っているかもしれないけど、伝えることはとても大事なことで、学生たちは口を揃えて語ります。これまでの人生の中で、「人と向き合うことは大変、怖い、面倒」と避けていたり、「人の意見に流されても波風立たないことが良い」と考えていたり、そもそも「誰かと話し合う経験がなかった」ことに気がつきます。気持ちを伝え合うこどもの姿が鏡となって、そんな自分に気づくのです。

ある参加者はこどもたちからももらったほんの少しの勇気を持って、「帰ってから誰かと向き合う暮らしをしたい」と話していました。

また思いもかけない成果をもたらしたのが、毎日のご飯作りです。日頃からご飯作りをしていない学生達は、私たちが想像もつかないほどの緊張感の中でご飯作りに挑みます。そうして作った料理を「おいしい！」と言ってみんなが食べてくれたことが嬉しかった、これでいいんだと思えた、自信に繋がったと言っていた学生たちの声が印象的でした。

「大人になってなんでも 1 人でできると思い込んでいたけれど、気づいていないだけでできないことがたくさんある」。普段当たり前の暮らしが自分の手で生み出されていないことに気づく。ご飯作りはまさに「暮らしから学ぶ」を体感する場になっていました。



学生を通して自分の未来を想像する

放課後児童クラブや学習支援事業に関わった学生が泰阜村のこどもたちにもたらしてくれた影響もあります。

泰阜村に生まれたこどもたちは、保育園時代から中学生までクラス替えもなく同じメンバーで育つため、多様な価値観に触れる機会がありません。学生たちが大学で勉強している話や、アルバイトや海外留学の話聞いたことは大きな刺激を与えたのではないのでしょうか。そのためか、学童の子は1年のうち約10日しかいなかったインターン参加者のことをよく覚えています。

学習支援事業の中でも、中学生から「何のために勉強するのか」「この宿題が何の役に立つのか」といった疑問をよく聞きます。勉強する理由が腑に落ちることはなかなか難しいものです。参加している学生たちも、いまだに「自分のやりたいことは何か？」「大学行ってみたいけどこの勉強の先に何があるのか」ともがきながら見つけようとしている方が多いです。しかし、そうした姿も含めて、泰阜村のこどもたちにとってインターンで出会う大学生は、自分の未来をイメージする見本になっていたように思います。

青年が惹かれる理由は、ねっこ教育への共感

学生たちはインターンに何を求めて参加しているのでしょうか？

その背景には、コロナ禍の影響も少なからずあると思いますが、それを抜きにしても若者の体験不足に対する本能的な渴望なのだと思います。小中学校などでも様々な体験を行います、「田植え」にせよ「工作」にせよ、限られた時間で決められたことをこなすだけのその場限

りの体験です。その後の長いスパンで生み出される影響や結果などを受け止める「経験」にはなりません。あるいは塾や習い事、クラブ、部活に追われていてとにかく忙しく、自ら何かに挑戦してみたいと考える時間がないという話も聞きます。自由な発想から挑戦し、トライ & エラーを繰り返す経験がないため、漠然とした不安を抱えています。だからこそスキルよりも、人の「ねっこ＝土台」を育むと言う考え方に共感する若者が多いのかもしれない。

「1 人の人としてこどもを含めた他者と向き合うこと」「自らも主体者として生きて行くこと」これらの学びは学生たちにとって今後の人生に大きな影響を与えるはずで。まだまだ潜在的に体験不足の「大人」たちはたくさんいます。ただの職場の体験に留まらず、こうした機会を届けることがインターンシップ事業の役割になってくるのではないのでしょうか。

参加者のアンケートより

・最初は上手く動けず焦りばかりが募っていましたが、こどもたちが互いを理解しながら、補い合いながら暮らし、話し合っている姿を見たり、いろんな世代と交流できた（子連れスタッフもいるため、0～60代までと一緒に働き、暮らしている）ことで、無理せずラクに楽しめるようになりました。その背景には、ありのままに嫌なことはいやと言っていい、はいはいと適当に聞くのではなく、思っていることは出している。そんな風に思わせてくれたこどもの姿があったと思います。

・相談員（グリーンウッド職員）と関わってみて、常に「ありがとう」という言葉が飛び交っている職場だと感じました。そのような空間の中にいて、誰かのために何かしたい気持ちが湧いたり、たくさんありがとうの気持ちを伝えたりすることができました。

・薪小屋建設のお手伝いで小屋の土台をつくるために必死で穴を掘り、作業の途中には焚き火を囲んでコーヒードrinkと休みをする。スタッフの方のな0から1を作ることを楽しんでいるところがとても魅力的で豊かだと思いました。



ブログ記事



人と向き合うはきれいごとじゃない | 暮らしの学校だいらぼっち

2023 年度は小学生 14 名と中学生 5 名の合計 19 名のこどもたちが集まり、1 年間共に暮らしました。3、4 年目の経験豊富な中学 3 年生たちがいることによって、暮らしや話し合いも大抵のことはこどもたちだけで難なく進んでいく毎日。しかし 1 年目のこどもたちはついていけただけでした。そんな状況から次々と課題が噴出します。暮らしの中で全員で向き合い考え行動する過程を経て、こどもたちの姿勢や関係性に変化が生まれていきました。



「話し合いをしてもムダ」毎日起こるもめごと

お互いのことをまだよく知らないはじめの頃は、毎日のようにケンカが起きていました。小学生が多いので、下校時にまとまってみんなで帰るということだけでもひと苦勞。列からわざと外れたり、近くににいる人にちょっかいを出したりして常にもめごとが起こります。ケンカをした当事者はもちろん、周りで注意する子たちも悩み傷つき、毎日のように誰かがイライラした気持ちを抱えながら帰ってきていました。そんな状況をどうにか変えたいと、列の順番を変えたり、下校をとりまとめるリーダーを交代してみたりと工夫を重ねましたがなかなかうまくいきません。一部のメンバーが必死に考えて解決をしようとしても状況は変わらなかったのです。そこで、小学生みんなが下校の問題について向き合うために、それぞれが抱えている困りごとについて伝え合うことをしました。しかし、自分に対して言われていることを素直に受け止められず反抗したり、傷ついて話し合いの輪から抜け出し部屋に閉じこもってしまったりするなど、思い通りにいかないことが何



度もありました。その状況に「何を言っても変わらない」「話し合いしても無駄」と、問題に目を向けることや人と向き合うということに諦めを感じるようになっていきました。

誰も答えがわからないから話し合う

2 学期には村の方や保護者、OBOG たちを集めた『だいらぼっち祭り』を行います。コロナが 5 類に移行し来訪の制限がなくなった中での開催は実に 4 年ぶりです。一体何人が来るのか、たくさんの人が押し寄せるのではないかと不安がありました。来訪者数を大幅に制限したり、別施設を中継でつなぐなど様々な案が出ましたが、「それでもたくさんの人を呼んでみんなで一緒に楽しみたい」と何度も話し合いを重ねました。コロナ禍を過ぎた 3・4 年目のメンバーも経験がないことだからこそ、全員が同じ土台に立ってアイデアを出し合うことで、1 年目のメンバーも主体的に話し合いに参加するようになりました。

しかし、日常的に個々でのトラブルは続き、一体感がない状態は続いていました。参加者全員と行うレクの当日の動きをイメージするために実施したリハーサルでは、ズルをしたと仲間を責めたり勝敗に納得がいなくてふてくされたりして、みんながバラバラに。せっかく頑張ったのに好き勝手に行動する仲間の姿に心が折れ、レク係のこどもたちは落ち込み泣きくずれてしまいました。しかし、レク係

がつらい気持ちや苛立ちも含めてありのままの想いをみんなに伝え、協力を求めると、少しずつ他のこどもたちも祭りに向けて本気でやらなければならないと気持ちが変化していきました。最後は時間のなさに焦りながら、やるしかないという危機感のもと一致団結して準備を進めました。

そして迎えた当日は、総勢 150 名を超える参加者がだいらぼっち祭りを楽しみました。自分たちで一から考え行動したことによって、たくさんの人に楽しんでもらえたという達成感は大きな自信につながりました。そして、本音で仲間と向き合うことで目の前の状況が変化した経験から、仲間に想いを伝える大切さに気づいていきました。



全員揃うのはたった 10 日！

3 学期となりいよいよ終わりが見えてくるとこどもたちは自分のやりたいことを優先するようになりました。ものづくりに励んだり遊んだり活動が充実していく半面、暮らしの仕事がいい加減になり、一部のメンバーに負担が偏り始めていたのです。さらに 5 人の受験生が帰省することにより、負担はさらに大きくなっていました。「最近ご飯隊に入る人偏ってない?」「みんなで暮らしをまわそうよ」と想いを伝えても状況は変わりませんでした。そんな中で 1 人の子が「みんなで揃って 3 学期をどう過ごすか話し合いたい」と持ちかけ、まずは現状を整理するためにどれだけの期間人が揃わないのかをカレンダーを見ながら段取りをとることにしたのです。すると、2 月は全員が揃う日が 10 日ほどしかないということが明らかになりました。「こんなに全員がそろろう時間は少ないんだ」と気づき始めたこどもたちは、いない人の分までみんなで暮らしを回さないといけないということに意識が向くようになりました。現状を整理することによってそれぞれが自分の気づきとして問題を捉えるようになったのです。「話し合う」とはただ想いを伝えあうだけではない。考えを出し、聞き合い、より良いと思う答えに向けて前に進むための大切な時間なのだと身をもって理解したのです。



向き合い続けたその先に

話し合いだけでなく、日々の作業や遊びといった暮らしの積み重ねからも関係性は創られていきました。薪作業では、みんなで集めた山

盛りのアカマツをパワーのある子が積極的に割り、苦手な子は積む仕事で力を発揮するなど、それぞれの得意を活かし苦手を補い合いながら片付けていきました。そのなかでお互いの良さに気づいたり、相手を認めたりと、人と向き合う姿勢が変化していきました。また何よりも日々の食事作りや一緒に食べること、遊びや何気ないおしゃべりといった、何でもない時間こそがお互いの距離を縮め、信頼し合える仲間としての関係性に繋がったのだと思います。

3、4 年目の中学 3 年生が卒業を迎え、2024 年度は大きくメンバーが入れ替わります。今年度でだいらぼっちを離れるメンバーは、引き継ぐことをテーマに過ごしてきました。ようやく 1 年間の最後には、「このメンバーなら安心して次を任せていける」と言えるだけの信頼が生まれていたのです。

ブログ記事



◎ 2023 年度参加者

	キャンペーネーム	学年	年目	出身
1	オオダコ	小 4	1	愛媛県松山市
2	ゆい	小 4	1	神奈川県川崎市
3	ちくわ丸	小 4	1	東京都杉並区
4	ラムネ	小 5	2	兵庫県西脇市
5	こうだい	小 5	1	愛知県豊川市
6	ヤモリ	小 5	1	神奈川県川崎市
7	あきと	小 5	1	三重県桑名市
8	仲っちゃん	小 6	2	神奈川県川崎市
9	すみれ	小 6	2	愛知県名古屋
10	チョコ	小 6	2	愛知県蒲郡市
11	トリシア	小 6	3	大阪府吹田市
12	かりん	小 6	1	神奈川県横浜市
13	まき	小 6	2	埼玉県上尾市
14	ねん	小 6	1	神奈川県横浜市
15	みー	中 2	2	愛知県名古屋
16	むぎちゃ	中 3	4	東京都練馬区
17	まなみ	中 3	3	東京都多摩市
18	ひろまさ	中 3	3	埼玉県春日部市
19	あだっちー	中 3	3	埼玉県草加市

関連ブログ記事

▶ [だいらぼっち卒業生インタビュー](#)



思い通りにいかないを楽しむ | 信州こども山賊キャンプ

2020 年より日本でも新型コロナウイルスがまん延し、緊急事態宣言や三密回避など私たちキャンプ団体にとって生命線ともいえる活動が制限されました。新型コロナウイルスが5類となった 2023 年度、やっと自然や人と存分に関われるキャンプを実施することができました。関わるということは思い通りにいかないことがたくさんあるということです。4年ぶりの制限なしの山賊キャンプは、こどもたちが存分に思い通りにいかないことを楽しみ、学び合う場となりました。



急遽のフィールド変更も学びと楽しさに

豪雨災害が各地で記録された 2023 年度、泰阜村も例外ではありませんでした。6 月に発生した台風の影響で、ベーシックキャンプ場とチャレンジキャンプ場をつなぐ橋が流されました。チャレンジコースの実施も危ぶまれましたが、村の方々ははじめたくさんの人の力を借り、キャンプ場の近くの土地を村の方から貸していただけることになり、無事チャレンジコースを開催することができました。

ですが新フィールドはこれまでは田んぼだったところ。かまどを作る石が無かったり、水道やトイレ、薪、食材をもらうベーシック本部までの距離が遠くなったり、川からも離れているので食器を洗う水もないなどこれまでの通りにいきません。お茶や食材、薪などの物資を運ぶにも重いものをデコボコした道のりを歩くので、仲間と協力しても大変です。そこで新しい道具として用意したのがリヤカー、その名も“チャレンジ号”です。もちろん道はデコボコなので、中々進まないのですが、こどもたちが力を合わせて、みんなで押して運びます。



決して楽なわけではないけれど、ただの苦行を楽しみに変えていく姿にこどもたちの逞しさを感じました。また川遊びのときに「よいかまどをつくるための石はないか」と遊びそっちのけで探してい

るこどももいました。暮らしを豊かにすることが楽しさを生み出す。思いがけず場所を変えたチャレンジフィールドはこどもたちに思い通りにいかない暮らしを楽しむ原点をあたえてくれました。

協働を実感。ごはんの歌が帰って来た

コロナ禍の 3 年間は、人と混ざって暮らす山賊キャンプにとって、マスクや黙食といった様々な対策をしなければならないもどかしい期間でした。そしてそれ以上に対策の一つ一つを違和感もなく受け入れていくこどもたちの姿に不安も感じていました。

5類となった今年度は衛生管理対策を万全にしながらも、コロナ前に戻したご飯作りを行いました。ごはんの歌を歌う時、小学校低学年の男の子が「思いつき叫んでいいの？」と不安そうに聞いてきました。いいよと伝えると体を動かし全身を使って歌っていました。その元気な姿にまわりもつられてやがて大合唱に。最後の夜ご飯で参加している全員で歌ったときは、なんとも言えない一体感がキャンプ場を包みました。歌を通して心と身体が解放され、仲間とのつながりを感じられたのだと思います。

人と関係を築いていくためには共通体験が重要です。これまで制限ばかりだったこどもたちは「人と一緒に何かをする」体験自体が奪われていました。火おこしからはじめるごはんづくり、滝の水の冷たさ、

一緒に見た星空。小さな共通体験の積み重ねが、人と関わる楽しさをこどもたちに伝えたのだと思います。

暮らしで生きる。山賊キャンプ

山賊キャンプの成果とはなにか？その答えのひとつにこどもたちの日常生活があると思います。キャンプの事後アンケートを読むと家でもキャンプの影響を受けている様子が綴られていました。

キャンプではこどもたちとスケジュールを決めます。思い思いに口にしたやりたいことがすべて模造紙に書き出されます。その時こどもたちは自分の意見でスケジュールが変わっていく、自分の行動で目の前の状況が変わっていく体験をします。自分の行動で世界が変わる。この体験がキャンプを終えた後の日常生活でも「自分で行動を起こせばもっと面白い」「まずはチャレンジしてみようかな？」と、一歩を踏み出す後押しとなります。

自分の手の届く範囲での小さな一歩は次第にこどもたち自身の未来を切り拓く力に変わります。ひと夏の山賊キャンプの経験がそんなこどもたちの力の手助けになればと願っています。



児童養護施設のこども対象 山賊キャンプ

山賊キャンプの学びを多様なこどもたちへ

昨年度スタートした千葉県の児童養護施設一宮学園のこどもたちとのキャンプを 7 月に 2 泊 3 日で開催しました。今年は 10 名のこどもたちが泰阜村にやってきました。2 年連続で参加している子もいて「今年も料理をやりたい！美味しい煮物をつくりたい！」と到着早々話しかけてきたり、木で作ったネームプレートを持ってきて「これ覚えてる？」と楽しみにしていたくれた事を感じました。2 泊 3 日ですが、やりたいことは全力でやろうと川遊びにドラム缶風呂、肝試しにキャンプファイヤー、ご飯も自分たちで作りました。

参加したこどもたちの感想には、「キャンプが楽しかった」「めしがうまい！」「また行きたい」など、シンプルな言葉ですが、楽しかった思いが伝わってきました。

職員さんの感想では、「いつも威張りがちな子が、リーダー役になって頑張っていたことに驚いた」「学園でもキャンプをする機会はある

保護者のアンケートより

○自然の中、集団の中で寝起きし、普段できない貴重な体験ができ、学校の勉強だけでは得られない多くの学びができました。

○初めて親子が離れてみて、こどもはもちろん親の方も、互いに成長できたのではないかと感じます。いろいろ心配な気持ちをぐっとこらえて、こどもの力を信じてみることも大事だと思いました。

○都会では自身が望めば快適で便利で楽な生活ができますが、そればかりでは駄目な気がしています。それを山賊では学ばせていただいています。

○「失敗しても自分で決めてチャレンジすることが大事。それがおきてだから」と言っていました。集団生活において「指示通りにできない」ことを叱責され続けてきた彼にとって、目から鱗が落ちるようなルールだったように思います。期待しすぎないように送り出しましたが、別人のようになって帰ってきました。「こどもでも自分で決めてやりたいことができた」との経験が自身につながり、生来の積極性を取り戻すきっかけになりました。

○考えて、遊んで、作って、食べて、寝て、人間の基本を学ぶ、体験する。手足が真っ黒で帰ってくるのを見ると、よく働き遊び、すごく達成感を感じられるキャンプだと思います。

ブログ記事



世代を超えて村全体に広がる学び | 泰阜村教育活動

こども対象事業／泰阜村

毎日 30 人近くが登園するようになった「放課後児童クラブいってきました」。1 年生から 6 年生までの多様な関わりからチャレンジの幅も広がり、毎日木工場で作業しているこどもが増えてきました。また小学校の川遊びも全校児童が対象となったり、保育園年長児対象の「あんじゃねっこ」は少しずつ保育園主導へ移行したりと進化し始めています。

放課後児童クラブいってきました



必要だから作る。こどもたちのものづくり

今年度の「いってきました」では木工が大人気で、多くのこどもたちが取り組んでいました。箸・スプーン・木べら・剣・看板等々…。これらのものを作るには、のこぎりや小刀といった刃物が欠かせません。こどもには危ないと思われがちですが、1 年生でもきちんと使い方を教えれば使えるようになります。大きい子たちが小さい子に教えてあげる姿もあれば、小さい子たちが大きい子たちの姿を見て真似することもあります。はじめのうちはなんとなく作っていることもあります。段々と“作る”だけでなく、“作ったものを使う”“必要だから作る”に変わっていきます。木べらは「キャンプの時に料理で使いたいから」剣は「チャンバラごっこをするため」。“〇〇したい！”があるからこどもたちは大変でも一所懸命に自分の手を使って必要なものを作っているのです。自分で作ったものには自然と愛着がわきますし、次はこうしよう！とレベルアップもしていきます。

“やりたいことのために必要なものを自分で作る”、当たり前のように当たり前にできないことを「いってきました」のこどもたちは日常の中でおこなっています。“やりたい！”の尽きないこどもたちが、この先もやりたいことのために自分で動く、そこを応援し続けていきたいです。

やりたい！を実現 こども企画キャンプ

昨年度から作ってきたツリーハウスの完成に合わせて、そこでキャンプをしたい！と高学年の子を中心に計画を練り始めました。日頃積み重ねてきた「やりたいことを実現する」力を発揮するときです。12 月に 2 泊、

しかもその内 1 泊は森の中という計画だったので、「小さい学年の子たちには体力的に難しいから今回は 3 年生以上にしよう」「寒いからこんな持ち物があるね」「ご飯のメニューはこんなのがいいね」など、タイムスケジュールからメニュー・食材・持ち物まですべて自分たちで計画しました。チラシも作り、数日前から物品準備をはじめ、キャンプ終了後は最後の片づけまで頑張りました。決して特別なことはしていないのですが、自分たちで計画して最後の片づけまでやりきるといこの体験が、こどもたちの中でまた新たなチャレンジの種となり、大きな花を咲かせることにつながると信じています。

ブログ記事



ツリーハウスプロジェクト

ツリーハウスが繋ぐ地域の力

昨年度から続くツリーハウスを建てるプロジェクト。こどもたちから「どんなツリーハウスがいいか」とアイデアを出して、村の大工さんと相談して設計図をつくりました。4 回に分けて行った作業に集まったのは小学生だけでなく、保護者や過去森で遊んだ青年、小学校の先生まで延べ 156 名です。作業は下草刈りから始まって、足場や手すりを作り、トンカチを握って壁打ちをしました。

作業中は昔のツリーハウスを建築した時の話や、森遊びした時のことを話してくれたことで世代を超えて仲間になり、作業を通して「協働」の大切さを体感したと思います。ただ業者に任せて作っても、自分たちで手入れするという意識は生まれません。みんなで手をかけたからこそ大切にされ、また次の世代に引き継いでいくことになるのです。

ブログ記事



泰阜小学校全児童対象川遊び

泰阜小学校全校児童 75 人で川遊び

泰阜小学校の全校児童で川遊びの授業を行いました。以前は 5.6 年生対象に隔年で行っていましたが、高学年児童を見ていた先生から「学年を絞ることはもったいない。どうか低学年も、特別支援のこどもも含めた全校で故郷の財産である川で遊ばせてあげたい」と相談をいただきました。私たちも先生方の村の子を想う気持ちに共感し、協力することとなりました。

人数が増えると異学年同士の交流が生まれ、川遊びの幅も広がるなど面白いことがある反面、見失いなどのリスクも高まります。そのため川の危険が理解しやすいように先生・低学年・高学年と対象を分けて安全講習を実施。当日の安全管理は先生方に交代で入っていただいたことで、全校で安全に楽しく、川遊びができました。

ブログ記事



泰阜村保育園年長児対象外遊び

グリーンウッド主体から保育園主体への第一歩

泰阜保育園年長児対象の「やすおかたんけん隊あんじゃねっこ」の活動も 16 年目となりました。元々「泰阜村の自然の中でこどもたちを思う存分に遊ばせたい」、「いずれは保育園単体でも活動できるようにしていきたい」という願いをもって始まったこの事業。森遊びや川遊び、或いは草木染めや陶芸など、泰阜の自然を利用して遊ぶことを中心に保育園と協働で行っています。今年度は園からの希望で、新たにみそづくりにチャレンジしました。年長児が仕込んだみそを次年度の給食で使用する、というルーティンを作りたいというのが園のねらいです。みそづくりをこどもと一緒にやる上での安全と衛生管理上の留意点や、どこまでをこどもの役割にするのかなど、こちらの持っているノウハウと一緒に活動しながら伝えていくことで、「これなら保育園単体でもできる！」と先生方に思っていたことができました。たった一つの活動ですが、自分たちだけでできると、思っていただけたことは保育園主体の活動へのとても大きな一歩となりました。

ブログ記事



これからを担う若者の可能性を引き出す | 青年対象事業

コロナによる制限もなくなり、青年たちが泰阜村へ訪れる機会が増えてきました。しかしコロナ禍や育った時代背景からか、これまでと同じように「自分で考えて行動するのが大事」と青年たちに伝えても、なかなか伝わっていない感覚がありました。言葉で教えるよりも「体験からはじめる」ことを目標にして、関わり方の提案やチャレンジの後押し、体験の場を提供することで成果が見えた一年となりました。

山賊キャンプボランティア

現場ですぐに活躍できるボランティアの育成

山賊キャンプボランティア（相談員）は常に正解のない問いと向き合っています。こども同士がケンカをしている、族（グループ）の話し合いが進まない…。そんな状況の中、「目の前のこどもとどう関わるのか？」という問いに自分なりの答えを出す、つまり「まずはやってみる」ことに時間がかかる相談員が増えているように感じています。「何をしたら良いのか分からない」まま過ごし、最終日直前でやっと主体的に動き始める。キャンプは数日しかないのに、体験の機会が少ないのは非常にもったいないと感じていました。

そこで、相談員が現場で「やってみる」ハードルを下げるために、事前のボランティア研修会で以下の内容を伝えることにしました。「①同じ族のこどもの名前を覚える ②やってみせる ③集合して輪をつくる」以上3つです。キャンプはこどもが主役の場ですが、ただ待つだけでなく、相談員も声を出したりやってみたりすることで変化が生まれ、場が動きます。「失敗しても大丈夫。とにかくこの3つをやってみてね。」と伝えていたおかげで、すぐに行動に移せる相談員が増えたように感じます。さらに行動した経験が自信となり、「次はこうしてみようかな」とか「他の相談員の関わり方を真似してみようかな」と次の行動への主体的なチャレンジにも繋がりました。相談員も体験から学び、こどもたちの体験の場の質の向上にも繋がっていきます。

ブログ記事



長期ボランティア

受入人数5名、総受け入れ日数 89 日！

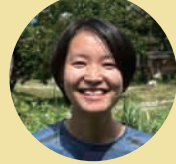
毎年2週間以上という長期間、山賊キャンプを支えてくれるボランティアがいます。この夏は5名の学生が長期ボランティアにチャレンジしてくれました。彼らの学びを一部紹介します。

HP



むろ「生き生きとした姿って？」

コロナ禍でこどもたちが五感を使って遊んだり学んだりする機会が減っていることへの問題意識と、「こどもたちの生き生きとした姿はどうやって生まれるのか、引き出せるのか」という問いのヒントを得るべく、長期ボランティアに参加しました。このキャンプを通して「こどもたちが生き生きする＝ずっと笑っている」ではないと気づきました。全力で何かをやってみる、向き合ってみる、その時の緊張感や不安の表情、達成した時の笑顔やうまくいかに壁にぶち当たった時の悔し涙、その全てがこどもたちを生き生きとさせていました。何かに挑戦し失敗したとしても、もう一度考えてやってみる、そのような挑戦と立て直す力を発揮できる場所が保障されていることが大事だと思うことができました。



アデリー「体験から学ぶ夏」

大学に掲示されていたポスターを見て、直観的にボランティアへ参加したいと思いました。しかし私はこどもと関わる経験が少なかったため、自分自身に務まるのか自信がなく、参加する決心がつかずにいました。そんな時、事前説明会に参加して温かい雰囲気を感じ、リピーター相談員の存在を知り、終了後も関わり続けたいと思える環境だということが分かりました。実際のキャンプでは、こどもたちと一緒に生き物を探したり川で水をかけ合ったりして、私自身が本気で遊んでいると、一緒に飛び込みに行こうと誘ってくれる子や見つけた生物を嬉しそうに報告してくれる子もいて、こどもたちとの会話が多く生まれました。キャンプを通して人と関わる楽しさや考えを広げ深めるための多くの種をいただきました。

相談員スキルアップ

キャンプと一緒に創る仲間を育てる

今年は相談員が泰阜村に足を運ぶ機会を沢山つくりました。薪作業や味噌づくりイベントを提供し、相談員がキャンプの裏側を知ることになりました。また協働する体験を重ねることで、相談員たちの新しい人との繋がりが生まれ、日常の支えになっていると話してくれることも。そして今年はスキルアップがしたい、輪を広げたい、という相談員たちの想いから、相談員が企画・運営する「山賊Tシャツづくり」と「相談員対象キャンプ」も開催しました。山賊キャンプの「失敗してもいい。何度でもチャレンジしよう」というコミュニティのあたたかさが、一人ひとりのポジティブな思考を生み出し、「やってみたい」のエネルギーに繋がっていると感じます。

ブログ記事



うみ

キャンプの現場で山賊Tシャツを見て「自分も欲しい!」と思っていました。その想いを言葉にすると、「いいじゃん!作ってみたら?」とスタッフが後押ししてくれました。企画や広報のチラシづくり、当日のイベントの進行まで、スタッフくみにサポートしてもらいながらも全体を任せてもらったので、やりがいを感じながら取り組むことができました。きっと自分1人ではできなかったけど、スタッフや相談員の皆と一緒にいたから最後までやり切ることができました。このTシャツをきっかけに次の繋がりが生まれると嬉しいです。



ブログ記事



大学との協働

大きな輪の中で青年を育てる

立教大学でボランティア募集説明会、研修会、想い出会など開催し、ボランティア育成に関して全面協力していただきました。また日本女子大学社会連携室の実習受入も行い、事前イベントでお話させていただきました。その他の大学でも授業に呼んでいただき（計15大学、約1800名）、ボランティアに参加する学生を増やすこと、私たちの教育活動を知ってもらうことに繋がっています。背景には学生の体験不足を大学としても課題と捉え、リアルな体験の場を求めていることにあります。大学組織とNPOという大きな輪の中で、青年育成に取り組んでいます。



大学実習受け入れ

身体を動かすことで腑に落ちる合宿

今年度は青森大学、岐阜聖徳学園大学の受け入れを行いました。岐阜聖徳学園大学は森の中でこどもが集える遊びの場づくりを実施しました。雨の中の作業のため作業も順調と言えず、後ろ向きな雰囲気も流れたこともありましたが、ある学生が「円陣を組もう」と提案。そこから一気に空気が変わり、むしろ逆境が協力を生み出しました。

「参加する前は、人からの指示待ちか自分の考えを伝えて終わりだったけど、人の話や考えを受け止めることの大切さを感じた」「新しいことをやってみるのが苦手だったけど、考え方が大きく変わった」多くが将来は教師を目指す学生たちです。体験を通して得た主体的で対話的な学びを、是非、将来の学校教育の現場で活かしてもらいたいと思います。

ブログ記事



種まきが各地の実りに繋がる | 学び普及事業

2012 年から受け入れを始めた視察見学や研修事業。これまで個人・団体約 170 件、約 800 名超の方が来訪されましたが、その後どのように役立ったのかは把握できていませんでした。今年度は広報のために来訪を経ての変化を伺ったところ、見学での学びを各地で活動に活かされていることが見えてきました。蒔いた種が各地の実りにつながっています。

広報強化で「知る」一歩目の裾野を広げる！

コロナ禍で見学者数が落ち込んだため、より多くの方に足を運んでいただこうと、過去に見学や研修に参加された方の声を団体名や写真も併せてホームページに掲載することにしました。特に滞在型の見学に参加された方には、参加の前後でどのような変化があったのか、研修や学びの場として今後期待すること等を伺ったところ、それぞれの現場で活かされていることを綴っていただきました。

全国的にも地域づくりや教育で知られた団体のリアルな声のおかげか、見学者数が一気に増え、多くの方々に参考にしていただくことができました。特に、ホームページを見てじっくり滞在するコースを選択する団体が増えたことで、その分満足度の高い見学にも繋がりました。



スタッフとのやりとりこそが学び

参加者アンケートから「実践や運営のヒントを得られました！」との声をたくさんいただきました。中でも、「大きな収穫は多様なスタッフたちとのやりとり」だったとのこと。懇親会では、各々のスタッフが教育への想いや、設立から現在までの紆余曲折、そして今なお試行錯誤の日々であることをめいめいに語り合っています。その想いと姿勢を目の当たりにして、改めて自分たちもやっていこうと思えたと、多くの方が口にされていました。ノウハウはもちろんのこと、その“本気”、そして根底にある本質に触れ、活動に欠かせない“熱源”がさらに熱くなる！そんな場にもなっています。



参加団体が各地で実践！見学レポートも多数

数年前より、一度見学に訪れた団体が二度三度と来訪される例が増えています。こどもの主体性や地域からの学びを重んじた漁村留学団体や、生徒の自治や地域との連携に取り組む高校の寮、そして学童に自然体験の導入を検討する環境保全団体等々。特に漁村留学や高校の寮の運営団体は、新たな課題解決や、新スタッフが入り共通認識を改めて持ちたいなど、設立から数年経ったからこそその来訪でした。現場を見ていただき、こちらのスタッフと意見交換する中で、二度目や初めての方も、それぞれの視点で学びを得られたようでした。そして特筆すべきは、見学や研修で得たことを土台に活動の指針や運営スタイルの基盤ができ、課題はありつつも順調に運営されているとのこと。本質を伝えているからこそ学びが継続的に活かされ、活動のブラッシュアップのお手伝いができていると実感しています。



生み出した成果が次の世界を創り出す

だいだらぼっちが創設されて 38 年が経ちました。だいだらぼっち卒業生のこどもがだいだらぼっちに参加する、キャンプに参加する、ボランティアに参加するなど二世代に渡っての関わりも次々と生まれています。2022 年度には元キャンプボランティアの方が勤める児童養護施設のこどもキャンプを実施しましたが、2023 年度はだいだらぼっち卒業生が村のイベントの講師として呼ばれました。これまで培ってきたつながりが具体的な豊かさとなって芽吹き、次の展開も生まれつつあります。



受験中心の塾でのキャンプが大きなきっかけ

辻 金沢でガイア自然学校をされていますが、理念や具体的な事業、目指しているものを教えてくださいませんか？

成田 「未来の地球を作るひとを育てる」をミッションに自然体験を手段にして、こども中心に幅広くいろんな人が成長できる場ができればと考えてます。はじめは日曜日の日帰りの自然教室と夏休みのキャンプを中心にやっていけれど、今は平日にシェア金沢*で午前中は幼児対象の森のようちえんをやり、午後は学童保育をやっています。

辻 元々京都で活動していたと聞いたけど、金沢に移住してガイア自然学校を立ち上げたのはどういった経緯ですか？

成田 はじめは京都の大きな塾で働いていました。塾のオーナーのお母さんが能登島出身でキャンプ場にする土地を買ったので、塾の生徒をキャンプに連れていくということになって。受験のための塾なので、小学4年生だけを200人ずつ3泊4日のキャンプを6ターン、毎夏やっていた。当然本業は塾だからキャンプのノウハウなんて誰も持っていない。自分自身が学生時代にキャンプのリーダーをやっていた経験があったので担当になったんだけど、まあ大変だった。スタッフは塾の先生とか、急遽集められたアルバイトだからね。キャンプの保健室に毎日こどもが「お腹が痛い」と言ってやってくる。カウントするとキャンプに参加している子の半分のだいたい1日100人くらい。こどもは不安だと自分を受け止めてくれる場所に逃げるんだよね。つまりスタッフがちゃんとこどものことを見ていなかった。これは変えなきゃいけないと、アルバイトの中でやる気のある青年たちを集めて、毎週勉強会をしてスタッフ研修をするようにした。その結果、なんと保健室の利用がゼロ。何をしたらかという、プログラムの進行は二の次にして、こどもの気持ちをちゃんと聞くということだけ。

能登島と縁ができて、夏だけのキャンプだともったいないからお前住んでなんとかしろと言われて25年前32、3歳くらいに家族で移住した。しばらくはキャンプ場と言っても農地のようなものだったのでほとんど開墾みたいなことをしていて、先ほど話した指導者育成が得意だったので、ボランティアの学生を集めるために金沢で指導者募集や育成をして、事業もしてというのがガイア自然学校の前身になった。そんな時に一度病氣して、はじめて人は本当に死ぬんだと実感したのね。死ぬまでにやりたいことをやろうと決意して、勉強中心の塾で自然体験をさせるんじゃなくて、それをメインにしようと2006年にガイア自然学校を立ち上げました。

やりたいことを応援する。その方がこどもは伸びる

辻 子育て中でよく決断したなと。何か突き動かされた出来事はあった？
成田 与えられた場ではあったけど、石川の自然は海も山も近くフィー



ルドとして京都よりも圧倒的に素晴らしくてそこに魅かれたのもあったし、能登島で自分のこどもたちが本当にのびのびと育っていた姿があったことが大きいか。京都の塾ではお受験が当たり前で、どこそこに合格しなきゃと親もこどもも戦々恐々としていた。一方で石川県の子らも勉強していないわけではないけれど、京都ほどではない。それでも行きたい大学に行っている子が多かった。そんな姿を見ていると京都に戻る選択肢はなくなったし、のんびりとのびのび育っていくこどもたちの姿こそ自然学校の大事なポイントだと思った。

辻 そのころはどこに違和感があった？

成田 塾のときにキャンプにいつも来ていた子でものすごく成績がいい子がいたのね。遊びが活発だから怒られることもあるけど、どんどん自分で考えて工夫して遊びを創るし、やりたいことをやっていく。そういう姿を見ているとやりたい子にムリやりやらせるよりも、やりたいことを応援してあげる方がこどもは伸びるんじゃないか、子どもも大人もお互いストレスないんじゃないか、成長として正しいのではないかと感じ始めた。

塾のキャンプはプログラムが時間割のように決まっていたけど、今はご飯を作る時間が決まっている程度で、やりたいことはみんなで考えてやっていこうというスタイルにしている。その方が成長が早いんだよね。

辻 グリーンウッドも似たような経緯がある。かにさんが幼稚園の同僚とのびのびしたキャンプをしたいとはじめてけど、当初はきっちりプログラム決めていた。そうすると外れていく子がいる。沢蟹を捕まえている子が、一日中夢中になっている姿を見ていると、こちらの方が普通なんじゃないかとそちらを応援するように変えていった。なるべくこどもたちが決められる場面とか素地を残して自由を与えたら、主体性が発揮できるようになった。リスクマネジメントは大変だけど、その方が成長すると確信したんだろうね。

こどもの体験をいかに広げていくか

辻 シェア金沢でもガイア自然学校は事業を行っているとのこと。はじまりはどんなきっかけですか？

成田 平日も何か事業ができないかと考えていたところ、たまたま参加者の保護者の中にシェア金沢を作った法人の方がいて、平日学童保育をやってくれないかという話になって。

辻 シェア金沢は幼児がいて、小学生がいて、そこをお手伝いする大学生がいて、障害を持っている方々もお年寄りもいるという、社会は多様でいろんなやつがいて当たり前という場所を創り上げている。イメージしてもなかなかできないエリアだね。はじめてこのコミュニティーを見た瞬間にしっくりきた。泰阜村のこどもたちは友達の家が遠いから、放課後に家帰ってしまうと遊び相手がいなくていくらか豊かな自然が身近にあっても遊ばない。そこで2015年から村の委託事業として放課後児童クラブをはじめました。だいだらぼっちや山賊キャンプと同じ理念で、こどもたちが何をするか



対談

ガイア自然学校
代表
成田裕
×
代表理事
辻英之

京都府出身。働いていた塾のキャンプ事業に携わったのをきっかけに2006年にガイア自然学校を立ち上げる。現在は能登島、金沢をフィールドに事業を提供している。

福井県福井市出身。大学卒業後の'93年、当時任意団体だったグリーンウッドに就職。'09年より代表理事となる。現在は青森大学社会学部教授としても活動。

も自分たちで考えて決めている。それに焚火もやって刃物も使って危ないこともやる。結構今は手ごたえがあって、年々登録者も参加者も増えて、こどもたちのチャレンジもどんどん進んでいる。

学童には、迎えに来たり畑の収穫にさそってくれたりするおじいちゃんやおばあちゃんがいて、都会から来た山村留学のこどもたちや我々スタッフもいる。いろんな奴らが暮らしの中に溶け込んでいる様子は、シェア金沢から触発された部分もあるな。学童保育はそこに住むこどもたちの日常を学びの場にできるので非常に可能性を感じている。グリーンウッドでは、この学童保育のノウハウをまとめて自然型の学童保育を長野県で進めようとがんばっている。ガイア自然学校とも意見交換して切磋琢磨していければと思う。あるいは金沢の子でも能登の子でも交換して体験できればいい。

今後我々自然学校に求められるもの、あるいは目指すものは何かありますか？

成田 やはり子どもに対しての教育だろうと思っている。体験を経てのこどもの変化を間近でみているから、もっと社会に拡げていく努力をしないといけないな

と。放課後の時間も日本全体が変わってきている。共働きも増えて、こどもは家でゲームして待っているしかない。公園もボールで遊んじゃだめだし、山とか行っちゃだめだし、昔みたいに外で自由に遊ばせてもらえない。能登島のこどもも目の前が海なのに海で遊んじゃいけないんだよね。漁師のこどもなのに釣りをしたことがないこどももいっぱいいる。学校で禁止されているからなんだけど、非常にもったいないこと。安全だけで考えると制限されてしまうけど、リスクマネジメントしたうえで体験させていくことがめちゃくちゃこどもに重要だということを伝えていかなければならない。そういった考え方を伝えることで社会に広がっていくこともあるし、本当の意味で人の成長は自然学校が担っているんだという意識を持っていきたいと思う。学校より先に自然学校に来て、みたいな。

辻 今、成田くんはJON(一般社団法人ジャパンアウトドアネットワーク)の代表理事もされている。我々も90年ごろから一緒に関わっているんだけど、当時からノウハウを隠さず共有しようとする意識が彼らにはあったのがおもしろかったなあ。

成田 独立の背中を押してもらった存在だね。情報交流が活発でいろんなことを教えてくれる。地方でやっている仲間が周りにいないから、若干視野が狭くなるけどJONに行くとなんか広がる。例えば森のようちえんをやってみたくて考えても良いフィールドはないしと悩んでいたら、JONで色んな手立てでやっている人がいて、そういう形もできるならうちでもやれるなと大分参考にさせてもらった。業界団体として自分が刺激や勇気もらったように、これで食っていくというサポートができるネットワークにしていければいいな。

能登半島地震を経て自然学校の役割は

辻 元旦の震災があって能登島はどうですか？



成田 妹夫婦も能登島に住んでいて被災しました。屋根の瓦が落ちたり、浄化槽が割れたというのはあるけど、どちらも全壊にも半壊にもなっていない。でも家の前の道路が崩落したままの状態が続いている。浄化槽の修繕も何度も申請書を書いて、やっと許可が出ても工事業者の仕事がいつぱいすぎて何年後になるかわからないというような話もされてしま

う。塾のキャンプ場の管理を今も任されているんだけど、そこも全壊はしていないんだけどところどころぐちゃぐちゃになっている。能登の人は「幸い生きていけるレベル。もっとひどいところがあるからうちは大丈夫」と奥ゆかしくて人に迷惑かけたくないというのがあるから、余計にどんどんいろいろなことが遅れていく。

辻 この厳しい局面でガイア自然学校として何をしていくべきと考えている？

成田 過去の震災の際は、風評被害で能登にお客さんが来なくなった。工事が得意なわけではないし、道路とか建物は国に任すしかない。だから得意を生かして復興後に能登の豊かな自然を紹介したり、こどもが怖がらずに遊べる場所を提供したりして人を呼び込むことが大事だと思っている。

辻 自然を脅威と捉えるのか豊かさで捉えるのか、どちらもきちんと向きあう人づくりをしていかないとね。東日本の支援に行った際に、被災された方に「私たちは被災者ですが、あなたは未災者なんだ」と言われた。いずれあなたたちも災害にあうかもしれない。施してあげているという接し方は辞めたほうが良いと。未だ被災していないこどもたちに対して、被災した経験から、自然体験の役割とは何だと考えていますか？

成田 確かに被災して自然学校で学べるアウトドアスキルは役に立ちそうだなと思うし、それを伝えることも悪いことではないけれど、災害のレベルによっては意味がない。それよりも自然学校でこどもが学んでいる、大変な状況になってもなんとかしようとする気持ちや力、前向きになれる気持ちこそ大事なと思う。

辻 火を起せせるとか、表面的なサバイバルスキルに目が向けられがちだけどね。

成田 被災した状況でキャンプしている人なんかいないから（笑）。むしろ周りの人に声をかけて、水はこうしようねとか、家の屋根が危なそうだからこっちで暮らしたよとか、周囲の人と協働するコミュニケーション能力の方がよっぽど重要。

辻 防災キャンプ的なテクニカルなことだけで震災に役立つのかというと、役立たないわけではないが、もっとそれよりも大切なのは前向きに生き抜く力だね。本質を大事にしている自然学校がこれから支持されていくんだろうね。

*シェア金沢…世代や障がいの有無を超えて、多様な人がつながり、地域社会づくりを行う街。高齢者向け住宅、学生向け住宅や学童施設の他に一般の人が利用できる天然温泉、カフェなどがある。

2023 年度寄付金総額

総額 2,367,395 円 (111 件)

※こちらに記載している寄付金の額と決算にある寄付金の額は、クラウドファンディングで集めた寄付金と振込手数料などを差し引いている関係上一致しません。

◎2023年度会計報告

1. 2023年度活動計算書

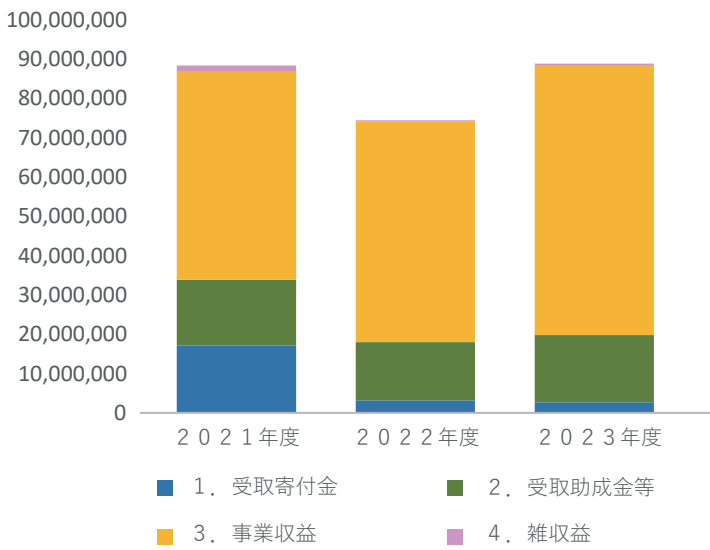
科目		(単位：円)
Ⅰ 経常収益		
	1. 受取寄付金	2,717,475
	2. 受取助成金等	17,120,000
	3. 事業収益	68,458,225
	4. 雑収益	579,355
経常収益 計		88,875,055
Ⅱ 経常費用		
	1. 事業費	人件費 42,994,718
		その他経費 23,622,906
		事業費計 66,617,624
	2. 管理費	人件費 8,479,777
		その他経費 11,537,977
		管理費計 20,017,754
経常費用計		86,635,378
当期正味財産増減額		2,239,677
前期繰越正味財産額		45,074,109
次期繰越正味財産額		47,313,786

2023年度受取助成金等内訳		(単位：円)
長期自然学校事業		6,000,000
学童保育・学習支援事業		10,420,000
民間助成金（積水ハウス）		700,000
経常収益 計		17,120,000
2023年度事業収益内訳		(単位：円)
長期事業収益		28,355,510
短期事業収益		35,924,161
講師派遣事業収益		1,980,535
応答助言事業収益		711,199
地域自然学校事業収益		99,800
指導者養成事業収益		80,500
情報受発信事業収益		80,000
普及開発事業収益		545,300
施設管理運営事業収益		681,220
経常収益 計		68,458,225

2. 2023年度貸借対照表

科目		(単位：円)
Ⅰ 資産の部		
	1. 流動資産	70,640,605
	2. 固定資産	17,118,991
資産合計		87,759,596
Ⅱ 負債の部		
	1. 流動負債	20,134,810
	2. 固定負債	20,311,000
負債合計		40,445,810
Ⅲ 正味財産の部		
正味財産 計		47,313,786
負債及び正味財産合計		87,759,596

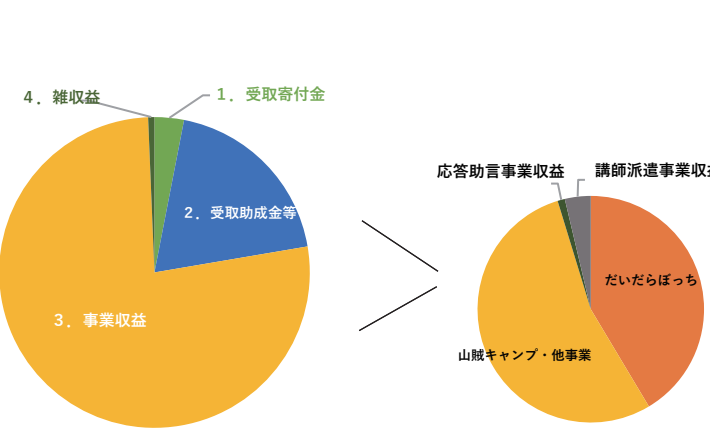
【経常収益推移（2021-2023）】



コロナウイルスの感染症の分類が5類となり、これまで行っていた対策は一部取り払われました。それに伴い山賊キャンプもコロナ前の定員に復活させています。キャンプ以外にも山村留学生の保護者の来訪、視察見学、インターン、大学生受け入れ事業の実施され、それぞれは少額ではありますが人の往来が増えたことにより収入も増加しております。キャンプ参加人数が増えたことも含め、村からの委託事業「放課後児童クラブ」と「学習支援事業」があることから団体の財政として安定し、昨年度に比べ1000万円の増額となっています。

寄付金は年々減少傾向にありますが、長野県みらい基金と協働で実施したクラウドファンディングにより、次年度の児童養護施設のこどもキャンプ受け入れの目的寄付を集め、目標金額を達成するなどの動きもありました。新たな収入源の獲得も視野に入れながら活動を進めていきます。

【経常収益内訳（2023）】



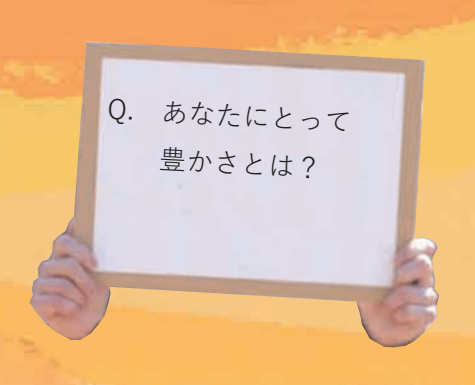
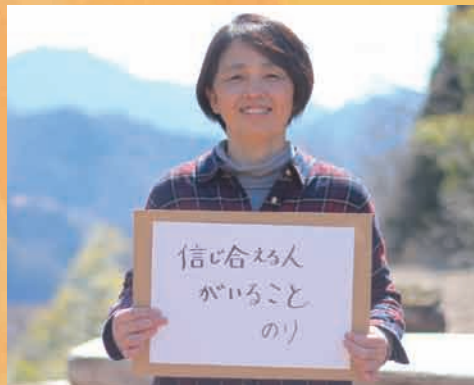
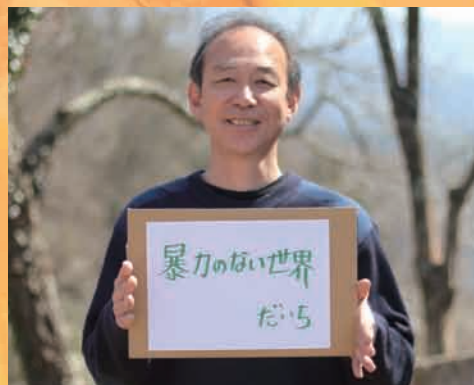
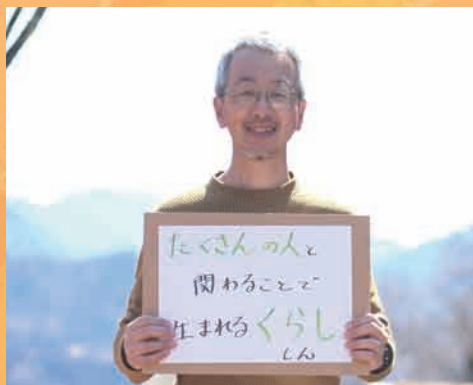
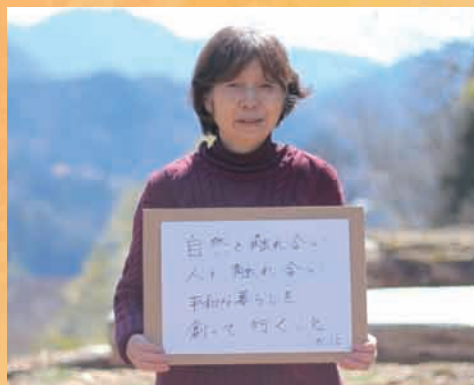
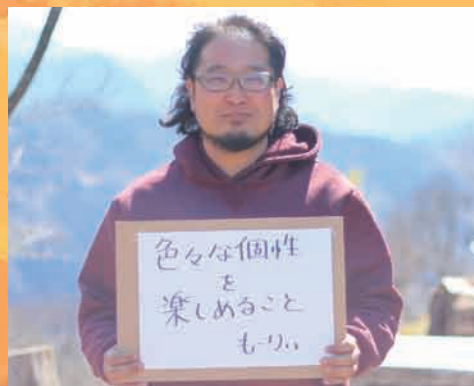
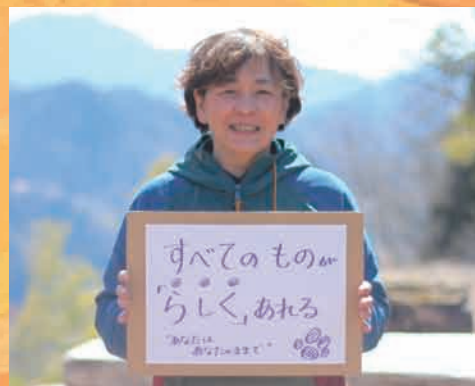
2023年度の夏の山賊キャンプでは、台風の接近により急遽4泊5日の2日程を2泊3日、3泊4日と縮小しての開催としました。ベーシックコース、チャレンジコースの計4組が変更され、大きな減収につながっています。また6月に発生した台風2号の影響で左京川キャンプ場内の橋が流出し、急遽チャレンジコースのフィールドを別で用意する整備費用等で支出も増えました。気候変動を肌で感じるほどの変化が毎年のように起きている状況を鑑みると、今後も山賊キャンプは天候による中止や縮小、トラブルの影響を大きく受けることが予想されます。山賊キャンプの収入に依存していたコロナ前から比べると様々な事業によって財政が支えられる健全な状況に近づいています。一方で山賊キャンプは教育提供機会の大きさや関わるステークホルダーも多いため、ある一定の規模は維持しなければなりません。予期せぬ出来事への対応ができる体力と共に、新たなステークホルダーとのつながり作りが今後の課題となってきます。

2023 年度事業一覧

	事業名	対象	内容	日程・期間・回数	参加人数
事業	暮らしの学校いだらぼっち	全国の小中学生	山村留学事業	1年間	19
	夏の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	夏休み期間に実施される3泊から11泊のこどもキャンプ	7/25～8/22 (全19組)	648
	冬の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	冬休み期間に実施される3泊から4泊のこどもキャンプ	12/26～1/6 (全4組)	111
	夏の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	7/25～8/22 (全19組)	195
	冬の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	12/26～1/6 (全4組)	34
	NPOインターンシップ	大学生や専門学校生・社会人	グリーンウッドでのインターンシップ	3日から10日間	11
	大学との協働事業	青森大学 辻ゼミ	山村の暮らし体験	10/27～29	8
	大学との協働事業	岐阜聖徳学園大学 中島ゼミ	「生み出す暮らしから『学ぶ』を考える合宿」	2/21～23	12
	山賊キャンプボランティア育成事業	山賊キャンプボランティア	研修やキャンプなどキャンプボランティアの育成	7企画	103
	環境系学生未来塾in泰阜村	青年	これからの人生をデザインするワークショップ型合宿イベント	9/4～5	4
	一宮学園キャンプ	児童養護施設一宮学園小学生	一宮学園の児童を対象とした2泊3日のキャンプ	7/21～7/23	15
	南アルプス子どもの村小学校 川遊び受け入れ	南アルプス子どもの村小学校児童	ークラスに対して川遊び体験の提供	9/14	34
地域	やすおか探検隊 あんじゃねっこ	泰阜村保育園長児	やすおか村の自然を存分に楽しむ活動	全8回	13
	放課後児童クラブ いってきました	泰阜小学校の登録児童	放課後に行う村のこども向け学童事業	1年間	46
	あんじゃね学校	泰阜村の小学生	森遊び、ツリハウス建設に関わる活動など	全7回	163
	学習支援事業	泰阜中学校の登録生徒	週2回の学習支援の実施	1年間	14
	自然体験教室	泰阜小学校児童	泰阜小学校全児童に対しての川遊び	8/27	71
	林業体験学習	泰阜中学校生徒	技術家庭で使用する材料の確保に伴う森林作業	3/11	22
講演	やすおか暮らしを楽しむ会 てまひま	村内の子育て世代	泰阜村の魅力を知る活動	全3回	73
	学びにつながる地域づくりを考える	沖縄県立玉城青少年の家	ひとづくりとまちづくりの循環～そこには何が必要なのか？	1	50
	清里ミーティング	公益社団法人 日本環境教育フォーラム	自然学校×ネイチャーポジティブ	1	100
見学	日本最長の長期キャンプの紹介	日本の長期キャンプを考える会		1	50
	グリーンウッド現地見学コース		基本の見学コース	8	20
大学授業	グリーンウッド現地見学コース		まると見学コース	7	27
	立教大学		「自然と人間の共生」	14	300
	立教大学		「ゼミナール発展編 リスクマネジメント」	14	11
	立教大学		「環境と文化」	2	53
	青森大学		「学問のすすめ」	15	45
	青森大学		「地域貢献演習」	15	45
	青森大学		「コミュニティ基礎演習」／「コミュニティ専門演習」	30	6／8
	青森大学		「社会学専門演習」	30	6
	青森大学		「地域産業論」	15	150
	青森大学		「ねぶた学」	15	45
	青森大学		「地域社会特講Ⅲ」／「地域社会特講Ⅳ」	15	15/15
	飯田女子短期大学		「ファーストエイド演習」	8	15
	茨城大学		「環境教育論」	1	18
	鹿児島大学		「自然学校へ行こう」	1	270
	駒澤大学		「社会参加実習」	1	30
	東海大学		「地域理解」	1	60
	東洋大学		「教育課程論」	2	140
	日本女子大学		「社会福祉とキャリア」	1	100
	日本女子大学		「社会連携を学ぶA（子ども）」	1	50
	日本女子大学		「社会連携・社会貢献活動Ⅰ・Ⅱ 実習受入について」	1	30
	福井県立大学		「非営利組織論」	15	50
	文京学院大学		「保育内容の指導法（環境）」	1	83
	法政大学 大学院		「地域共生社会特論」	1	10
	法政大学		「環境教育論」	1	13
	松本大学		「自然体験活動論～対象者理解～」	1	48
	横浜国立大学		「教育課程論」	2	130
	岐阜聖徳学園大学		リスクマネジメント	4	50

2024 年度事業計画

	事業名	対象	内容	日程・期間・回数	参加人数
事業	暮らしの学校いだらぼっち	全国の小中学生	山村留学事業	1年間	17
	夏の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	夏休み期間に実施される3泊から9泊のこどもキャンプ	7/23～8/25 (全18組)	630
	冬の信州こども山賊キャンプ	全国の小中学生	冬休み期間に実施される3泊から4泊のこどもキャンプ	12/26～1/6 (全4組)	110
	夏の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	7/23～8/25 (全18組)	190
	冬の信州こども山賊キャンプボランティア	青年	山賊キャンプの相談員及び運営サポート	12/26～1/6 (全4組)	40
	MFA（救急救命法）講座	青年（キャンプボランティア）	キャンプで使える救命法講座	7/7	12
	NEALリーダー養成講座	青年（キャンプボランティア）	自然体験活動指導者養成講座	9/21	15
	山賊キャンプ相談員向け企画	青年（キャンプボランティア）	山賊キャンプ相談員のスキルアップ活動など	全3回	55
	NPOインターンシップ	大学生や専門学校生・社会人	グリーンウッドでのインターンシップ	3日～10日	10
	大学との協働事業	青森大学 辻ゼミ	青森大学辻ゼミ合宿	未定	6
	大学との協働事業	岐阜聖徳学園大学 中島ゼミ	「生み出す暮らしから『学ぶ』を考える合宿」	2/12～14	10
	サンカクシャキャンプ	NPO法人サンカクシャに関わる青年	1泊2日のキャンプ	6/25～6/26	24
	児童養護施設一宮学園キャンプ	児童養護施設一宮学園小学生	一宮学園の児童を対象とした2泊3日のキャンプ	8/20～22	17
地域	先生になりたい人のための未来を創るワークショップ	青年	「ルールとは何か」をテーマにしたワークショップ	9/9～9/12	15
	やすおか探検隊 あんじゃねっこ	泰阜村保育園長児	泰阜保育園長児にやすおか村の自然を存分に楽しむ活動	全6回	対象者 11名
	あんじゃね学校	泰阜村の小学生	森遊び、川遊び活動など	全3回	各回 20名
	放課後児童クラブ いってきました	泰阜小学校の登録児童	放課後に行う村のこども向け学童事業	1年間	登録者 52名
	学習支援事業	泰阜中学校の登録生徒	週2回の学習支援の実施	1年間	登録者 16名
	やすおか暮らしを楽しむ会 てまひま	村内の子育て世代	泰阜村の魅力を知る活動	全3回	50
講演	泰阜小学校 自然体験教室	泰阜小学校全校児童	川遊びを通して泰阜村を知る	1回	61
	教育、地域作りなどのテーマ	行政、学校、企業、団体他		10	500
見学	グリーンウッド現地見学コース	行政、学校、企業、団体他	基本の見学コース	1	30
	グリーンウッド現地見学コース	行政、学校、企業、団体他	丸ごと見学コース	1	10
大学授業	立教大学		「自然と人間の共生」他	15	300
	青森大学		「社会学専門演習」他	15	300
	その他大学ゲストスピークなど		教育・環境教育・地域作り・福祉 などの分野	10大学20学部程度	800



みなさんの「あなたにとっての豊かさ」をぜひ書いてみてください。

